繰り返しの現場体験で学習の意味を理解し、実践力を身に付ける

嘉悦大学ビジネス創造学部

（東京都小平市）

女子短期大学から共学の四年制大学へと転換を図る嘉悦大学は、昨年度、「ビジネス創造学部」を新設した。専門的な知識を学ぶと共に、在学中から社会と接点を持ち、実践を繰り返すことで確かな実務力を育成しようとする同学部の取り組みについて取材した。

嘉悦大学キャンパス

学生のうちから業界の内部に深く触れる

嘉悦大学は今年創立110周年を迎えた。長年、嘉悦女子短期大学として女子学生の社会進出を支えてきたが、時代の変化を受け、共学の四年制大学を創設したのは平成13年。平成24年には新たに「ビジネス創造学部」を開設した。同学部には現在1、2年生合わせて約280名が在籍している。

「嘉悦学園の創設者である嘉悦孝（たか）は、女子商業教育において、徹底して実学教育を行いました。この理念を、現代版として実現するのがビジネス創造学部です」。

新学部における教育についてこのように説明するのは、跡田直澄学部長だ。

新学部開設の背景には、社会的に大きな課題となっている新卒者の早期退職がある。同学でも、就職しても3カ月、1年ほどで辞めてしまう卒業生が多かったと言う。

「何が駄目なのだろうかということを考え、行き着いた答えは『学生が〝企業〟を知らないから』。大学で学んだ知識が企業の現場でどのように生かされているのか、学生はほとんど知らないのです。昨今では多くの大学でインターンシップが盛んに行われていますが、なかなか組織の中にまでは入れてもらえません。期間の短さや学生自身のスキルを考えると仕方ない面もありますが、どうしても表面的な雑用中心で、外から見るだけのお客さん扱いになってしまう。しかし、もっと長い期間、繰り返しの実習を継続して行えば、業界の中までよく知ることができる。そうすることで本当の実践力が身に付くのではないかと考えたのです」。

跡田学部長の言葉通り、ビジネス創造学部の特長は、在学中に、継続した企業実習を組み入れていることである。

学生は2年次からビジネス・ユニット（BU）とアカデミック・ユニット（AU）に分かれる。BUの学生は2年次から企業での実習を繰り返し、AUの学生は学内での活動を中心に企画・立案に関する学びを深めることが目標となる。いずれにしても、実際に社会に出て働く現場を意識し、経営やマネジメント、会計といった大学での知識科目が実際にはどう生かされ

るのか常に考え直しながら学習を深める4年間を目指しているのだ。

プロジェクト科目で長期間の企業実習を実現

BUの学生が参加する実習科目の一つ、「プロジェクト科目」は、同学部の特徴を最もよく表している科目だ。1年次が終わった春休みから3年生の夏休みまで続くこの科目では、「フードビジネス」「出版ビジネス」「ブランドビジネス」「観光ビジネス」「インターネットビジネス」など9分野に分かれ、長期の企業実習により、業界研究に取り組む。毎週水曜日、学生は丸一日実習先に出向いて活動を行っている。

ブランドビジネスでは、株式会社生産者直売のれん会と提携し、大学のある小平市の名産ブルーベリーをブランド化して認知度を高めることを目標に活動を行っている。指導担当の白鳥成彦准教授は、この取り組みについて次のように説明する。

「今年の春休みから、11人で参加しています。ブランド化された商品について理解し、その商品をお客さまの顔を見て売ることを体験するため、まず手始めに東北地方の物産の対面販売を行いました。その後は、ブルーベリーでプリンを作り、販売しています。試作を重ねる段階で、味やコストについて現場で厳しい意見を言われることもあり、学生はかなり苦労したようです。目下の目標は、8～9月の2カ月で1万個売ることです」。

どの業種でも、まずは現場を知ることから始め、2年次を通して企画や生産管理、販売など実際の業務を、3年次には人事・労務についても体験させるのが目標だという。もちろん提携先の企業にとってはビジネスであるため、時間管理やコスト感覚について厳しく指摘される。一方で、大学生だからできること、浮かぶアイデアもあり、相乗効果が期待されるところだ。

提携先企業には、「ビジネスパートナーとして学生を育てる気持ちで協働してもらえるようお願いしている」と白鳥准教授。「短期間のインターンシップとは違い、1年以上の期間、学生と付き合うことになります。面倒もあるでしょうが、若い学生は必ず後で伸びてくれるという期待を持って見ていただくこともできていると思います」。伸びしろが感じられれば、教える方も面白いに違いない。ついていけなくなる学生もいるが、大半は、自らの不足に気付いたり、大学で学んだこととの関連を見いだして食らいついていくという。

大抵の場合、現場のことは就職して初めて知るものだ。そこで改めて学びたい、知識を補いたいと思ってもなかなか難しい。「プロジェクト科目」をはじめとする実習科目では、大学の講義で学んだ知識が現場でどう使えるのか考え、現場で得た経験や問題意識をさらに発展させるために大学で学ぶというサイクルを在学中に繰り返せるのが強みだ。また、学生だからこそ何度もチャンスがあり、失敗しても挽回できること、一人で責任を負うのではなくチームで支え合うということも、学生にとってはチャレンジの大きな後押しになる。

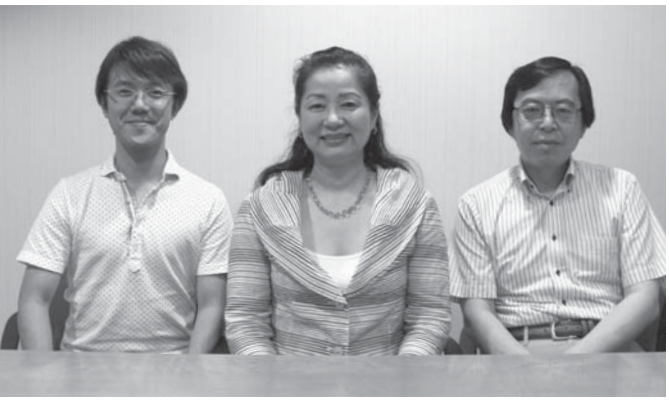
白鳥准教授は「この体験を通して、組織の一員として社会に出て働くことと、アルバイトとの違いを理解してほしい」と話す。

「教員よりも厳しく接してくれる現場の方々は、本当に貴重な存在です。学生は、どれくらい自分に責任があるのかも感じられるでしょう。また、業界にはどんな企業があるのか、どんな仕事をどのようにして行っているのかまで、広く関心を持ってほしいと思っています」。

来年度は3年生と2年生が共にプロジェクトに参加することになる。現2年生は、一年間の経験を元に、下級生に教える立場にもなるのだ。そこでさらなる成長が期待できる。

基礎はやはりマナーとコミュニケーション

このような実践を支えるのは、やはり初年次教育だ。同学部ではビジネスの現場で基礎力となる外国語や情報コミュニケーション、ソーシャル・スキルを基礎教育科目として位置付け



（右から）学部長の跡田直澄教授，古閑博美教授，白鳥成彦准教授

最新事情㉘……嘉悦大学ビジネス創造学部

ている。

そのうちの一つ、「ビジネスコミュニケーション」は、1年次春学期開講の選択科目だ。ビジネスマナーやコミュニケーションの技法だけでなく、ホスピタリティ精神についても学ぶ。選択とはいえ、1年生全員に受講を推奨しており、2年次以降の活動の精神的な軸を作る場となっている。担当する古閑博美教授は、「学生には常々『学生たれ』と話しています。ただ大学に来ればいいのではない。学ぶのだという自覚が必要」とし、「ビジネスコミュニケーション」の目標についてこう説明する。

「私が教えたいのは〝社会規範〟です。学生も大きく捉えれば社会の一員であり、社会に出る直前の人として期待されています。例えば他人の作業の邪魔になるような私語をしたり、それを注意しなかったり、遅刻したりすることは、社会で許されないのと同様、教室でもしてはならないこと。このような社会規範が身に付いていない学生が多いように感じます。社会規範を知らないままでいると、どのように振る舞ってよいのか分からず、打たれることに弱くなり、社会に出てもすぐくじけたり、精神的に大きな打撃を受けてしまうのです」。

最近では、異世代の大人と触れ合う機会が減少し、学生が自然に学び取れる場が減っている。また、企業にも就職後にそのあたりを指導するだけの余裕はなくなっている。大学が最後の教育のチャンスでもあるのだ。

もう一つ、古閑教授が大事にしているのは日本文化だという。

「昨年度と今年度は、外部講師に狂言師の方を招きました。やはり日本人として日本文化には興味を持ってほしい。知識として知っていれば社会人になったときに、お客さまとの会話のきっかけにもなります。また、狂言はもともと野外演劇ですから、発音・発声を明確にする、表情を豊かにするといった所作を学ぶことができます。もちろんそのまま真似をするわけではありませんが、身体の使い方の基礎を知っていると、相手とのコミュニケーションが楽になります」（古閑教授）。

「古閑先生の厳しい指導のおかげで、実習に出向いた学生が、マナーの大切さを実感した、学んでおいてよかったと振り返っていましたよ」と白鳥准教授。その言葉に、「講義では、愛情を持って、厳しく指導しています」と古閑教授は笑みを浮かべる。

創設者・嘉悦孝が掲げた校訓「怒るな働け」は、働き続けるのが人生だということを端的に表した言葉。これを具現するのがビジネス創造学部の教育だと先生方は口をそろえる。学習の中心に徹底した現場体験を据える同学部。四年制大学では、これまでにない新しい試みだ。第一期生が卒業する平成28年の春にどのような成果が出るのか、注目が集まっている。

政治家などにインタビューを行い，
出版社の雑誌WEBサイトで掲載
（プロジェクト科目出版ビジネス）

ビジネス創造学部で2年生から取り組む
「プロジェクト科目」。
ブランドビジネスでは，地元小平市の名産である
ブルーベリーを使った商品を開発，販売

カフェチェーン店での店舗実習，
新メニュー企画などを行う
（プロジェクト科目フードビジネス）

小平市長を訪問し，
活動報告も行った